

「信仰年」と私たち (II)

主任司祭 吉池 好高

ベネディクト十六世教皇様の発意によって、第二バチカン公会議開幕五十周年を記念して開始された「信仰年」は2013年の典礼暦の最終日である王であるキリストの祭日までと定められています。このことは、「信仰年」のこの一年を教会の典礼暦に沿って生きるようにとの教皇様の私たちへの呼びかけです。「信仰年」のうちに迎えた2013年の教会の典礼暦は待降節をもって始まりました。典礼暦のこの季節の最初の頂点は、言うまでもなく、私たちが信じている私たちの主イエス・キリストのこの世界における誕生を祝うクリスマスの大いなる喜びです。カトリック信者としての私たちにとって、信仰を生きるということは、私たちが洗礼を受けることによってその一員として迎え入れられた教会が二千年の歴史を越えて伝えてきた、信仰によってのみ受け入れることができる、私たち全ての者の救い主イエス・キリストの誕生を祝う喜びを、私たちが生きる日々の生活の中に受け入れて行くということです。教会がクリスマスの大祭日をもって記念し、そうすることによって今も世界に向って告げているクリスマスの喜びのメッセージ・福音がこの世界の中に生きる私たちの日々の心に届く時、私たちは、私たちが受け入れたキリスト教の信仰の喜びを知ることが出来るのです。ルカ福音書のクリスマスの物語の中に結晶し、教会に伝えられてきた信仰の中で、私たちは「私たちの信仰の母」である聖母マリアに出会います。聖母にとっても、待降節は、天使のお告げを通して示された神の御計画に身を委ねることによって開始された「待降節」です。神が約束されたことはクリスマスにおいて実現していることを、聖母がそうされたように、身を開いて迎え入れることが私たちの日々を真の希望に開かれた「待降節」の日々に変えてゆくのです。